



神戸国際大学
キリスト教センター通信

第133号
2025年7月1日

「裸足と文化」

神戸国際大学
キリスト教センター長
浅野 貴彦



まもなく夏本番を迎えますが、夏休みにビーチや河原でのんびり過ごし、なにも履かずに水遊びして、駆け回ることを楽しみにしている学生もいらっしゃることでしょう。昨年、海外研修の随行教員としてオーストラリアを訪れましたが、裸足で街歩きをしている人が少なくなく、モールや公園周辺でもよくみかけました。こうした慣習に特段の理由はなさそうで、「自分らしく生きているのであれば、他人の目はきにしない」といったおおらかな国民性や、先住民族の文化も関与しているかもしれません。オセアニアの先住民族の文化では、「裸足」で自然とふれあいながら生活することで「母なる大地」や土着の動植物と繋がることができ、また神聖な場所で靴を履く行為は冒瀆行為につながる、といった習俗習慣から「裸足」になるということが日常だったようです。

日本では土足文化が根付いていて、自宅や他人の家では履物を脱ぐことが一般的ですが、戸外で裸足になるにはちょっとした勇気が必要です。

もっとも日本でも一世紀ほど前までは裸足が一般的で、1901年に警視庁から「裸足禁止令」が出されるまで、庶民は裸足で、下駄や草履の生活をしていたようです。江戸時代、足袋などはぜいたく品で、庶民は裸足で外を歩くことも珍しくなかったようです。

ちなみに時代をもっと遡れば、原始時代は皆裸足でした。人間の体は基本的に不整地を裸足で歩くことができる能力をもっており、獣から裸足で走って逃げることがないならば、とくに種として絶滅していたはずで、現代の人々が屋外で素足になるとちょっとした解放感を感じるのも、そうした原初の感覚を取り戻すことに起因するのかもしれませんが。

また、裸足はキリスト教文化とも関連しています。イエスが弟子たちの足を洗った行為は、新約聖書「ヨハネによる福音書」13章に記されており、その「最後の晚餐」でのシーンは謙遜・奉仕・愛の態度をシンボリックに描いています。

当時のユダヤ社会では、足を洗うのは召使いの仕事でした。人々はサンダルを履き、砂埃の中を歩いていたため、食事の前に足を洗うことが習慣でした。とはいえ、足を洗うという行為は、主人がすることではありませんでした。イエスは自らを「主」であり「教師」とであると認めたくて、弟子たちの足を洗ったのは、「謙遜」を尊び、「仕える者」であることを示そうとしたからだといわれます。また、互いに愛し合い、仕え合うことを伝えたかったのかもしれませんが。イエスは弟子たちに「私があなたがたにしたように、あなたがたも互いに足を洗い合うべきだ」と述べています。

日本語で「足を洗う」とは、「不適切な付き合いや習慣を断ち切る」という意味もありますが、キリスト教文化ではむしろ人々の絆を深め、広げていく行為を象徴しています。この夏、仲間との輪をひろげ、充実した学生生活の時間になるよう願っております。



ひとくちメモ

本学院の八代智理事長の主教按手式と日本聖公会神戸教区主教就任式が、2025年9月20日（土曜日）に神戸聖ミカエル教会で行われます。主教按手式とは、主教被選者を主教に叙任する際に、頭に手を置いて祈り、使徒職の継承を表す儀式です。